

毎日充実している、  
仕事をしている時が楽しい



【南阿蘇ふれあい農園】

田尻 徹さん

南阿蘇村出身、代々農家で5代目。  
熊本県立熊本農業高等学校、熊本県立農業大学校卒業、益城町の農家で半年研修を経て、ふれあい農園を継ぐ。  
現在、妻、子ども5人(15歳、12歳、11歳、9歳、7歳)、両親、祖父の10人暮らし。



MINAMIASO VILLAGERS  
南阿蘇  
村人図鑑

代々農家で5代目  
小さい頃から畑に行っていた

小さい頃の遊び場は南阿蘇村の自然の中。川では友達と「アグラン」(通称)を釣り、焼いて食べていたという自然溢れる子ども時代を過ごしました。

「父の代は大玉トマト、イチゴ、ブドウを作っていました」。徹さんの代になつてからは、ミニトマトとイチゴを栽培しています。従業員10人、研修生3人を受け入れ、ミニトマトのハウスは4ヶ所計1ヶタール。イチゴのハウスは0・5ヘクタールという広さ。イチゴは、ゆうべに、ひのしづく、かおり野、恋みのりの4種類を育てています。

夏は涼しい時間の朝5時から仕事が始まり、ミニトマトの収穫、手入れ、選別、出荷などを行い、冬は朝8時からイチゴの収穫や作業などを行います。

「夏は暑く、冬は寒い。今でも冬の寒さには慣れないと、仕事は楽しい」と話す徹さんの表情から、充実感が伝わってきます。

地域のお祭りでは

地元の仲間たちと盛り上げています

徹さんが住む一関地区では毎年7月に八坂神社で『ぎおんさん祭り』が行われています。「やはり以上は自分たちが楽しく続けていくようになつていています。女性たちも出店で関わってくれるので、お祭りは大人も子どももたくさん参加し楽しんでいます」。

観光農園は利用するお客様が多いので、今年ハウスを増設しました。「研修生が3人いるので、その人たちの見本になればと思っています」と、熱いまなざしの徹さんです。

今季も南阿蘇ふれあい農園のイチゴ狩りは12月中旬頃から始まります。阿蘇の寒暖差ある気候で甘みが増した、温泉栽培のイチゴがきっとたくさんの人の笑顔を生み出すことでしょう。

南阿蘇村の暮らしは、足りないものは何もないじ年代の仲間がいることが大きい。お祭りでは御神輿を担ぎ、神樂も舞います。

「お互いに気を使つていて、仲がいいんです」と、地域の人たちとも信頼し合い、地域がよくなるように語りあうことも多いようです。